

井上ひさし作

『下駄の上の卵』

『偽原始人』

—— 親には見えない

少年たちの心——

小池 正胤

昭和二年の夏、山形県米沢市から二〇キロ西北に入った小松町（現川西町）に野球好きの小学六年生の五人がいた。終戦後の野球ブームはこの地の少

年たちにも火をつけていた。彼らは都会から遙かにはなれていたので、復活したプロ野球も新聞とラジオで僅かに知るだけだった。それもみんなの家にあ  
るわけではなかった。それだからこそ、いっそう彼  
らは憧れた。だが少年たちの使うグローブは軍手に  
藁を巻きそれをボロ布で包んだものだったし、ポー  
ルはビー玉にすいき（乾した里芋の茎）を巻き、布  
をかぶせたものだった。彼らの夢は、本当のゴムポ  
ールを持つことだった。地元の造り酒屋で古陶磁器  
博物館を経営する老人がゴムボールを持っているこ  
とを知った彼らは、それをくすねようとして失敗す  
る。だが、ボールの入った箱の上書きの製造所の住  
所は目に焼きついていた。彼らはボールをもとめて  
換金のための米を背負い、僅かの小遣金をポケット  
にして家出した。汽車は占領下の社会の縮図そのま  
まを見せながら、彼らを運んでいく。途中、とつぜ  
ん米軍大佐の私的な急用で列車後部が切り離され、  
米を一番多くしよった友だちのひとりには乗り遅れて

しまった。

東京の焼け跡と、そのうえに急造した闇市と、食べ物と、飢えた人々と、危険がいっぱいの街を彼らはただボールを求めて行く。また、乗り遅れた友達之母の結核にきくときいたストマイを探して、聖路加病院をたずねあてて断られる。危ない目になんとか会い、だまされだまされたあげく、ようやくボールを手にした少年たちは、やがてまた東北の小さな古い宿場町に帰って行った。途中で乗り遅れた友達が列車を追って瀕死の重傷をおったことを聞いた。

太平洋戦争終結翌年の昭和二年ごろ、それは、いま幼稚園から中学校の子供をもつ親たちにとって、はもはや歴史的過去になってしまった。その当時の様子は想像するのが不可能なほどに変わっている。だが、それだけに私たちはこの時代のことを語り伝えていかなければならないと思う。その時代の地方と東京、そしてことに街と人とのようすを、この作品以上に効果的に描き出したものを私は知らない。

ここでまた、この混乱と貧困と危険がみちみちている中に飛び込んで行く少年たちのひたむきな姿が感動的に綴られている。感動的とは、感傷的と違いう。同情的というのでもない。少年たちの無謀さが、つぎつぎに社会とは何であるかを知らせ、彼らに広い視野を開かせていくその刻々の印象を言うのである。

いま無謀といった。しかしこれは大人たちの見方である。この少年たちは彼らなりにじゅうぶんに用意して家出をした。汽車の乗り方にも「きせる」を考えた。これは無謀な悪い乗り方にはちがいない。しかしこれも彼らの用意のひとつだった。そしてとにかく目的を達した。大人たちはおそらくあわてふためき、驚き、帰って来た子供たちを殴りとはずだろう。少年たちの心は永久に大人たちには理解されず、やがて彼らもつぎの世界へ移っていく。大人たちは子供たちのころの奥底は理解できず、子供たちもまた理解してもらおうとしない。いや理解して

もらうことを思いつかないのではないか。

こういう子供たちの世界をもうすこし現代に近づけて書いた井上ひさしの作品に『偽原始人』（昭和五一年）がある。場面を東京の近郊都市におき、小学五年の男の子数人の奇妙な日常を会話を中心に描いている。かつての野球少年たちは三十年後には、有名大学の入学を小学校から母親に期待される少年たちに変わっていた。みんな塾がよいをしながらひとはひそかに母親を殺すことを計画している。それは母親たちの圧迫にたえかねた担任の女教師がガス自殺をはかり、なかば植物人間化したことへの復讐である。彼らはほとんど牢獄に近い受験勉強への強制から家出する。しかし三十年まえの少年たちにあった家出の目的、ひとすじにボールを求めたそれはない。最後に彼らは佯狂（狂気をよそおう）を演ずる。親たちは精神科のカウンセリングを受けさせようとする。このところで大人と子供は行為として一致する。だがその間はほとんど絶望的に開いてい

た。精神病院に入った子供たちはきわめて正常に「ここに根を生やそう」と呪文のように唱え続けるのだ。

十年以上まえに書かれた作品だがいまでもじゅうぶんに考えさせるところをもってるといえるだろう。登校拒否の子供たちを精神的にカウンセリングしようとすること自体に問題があるということがこのごろ言われはじめている、と聞く。

井上ひさしの作品の傾向は多彩でひとくちにいうことは出来ない。だがその底に一貫して流れるのは不易流行の社会と人間への批評である。

ひとはどうやって大人になって行くのか。そのひとつの節目は小学校の高学年あたりだろう。この二つの作品はかつて占領軍に十二歳といわれた日本が大人になって行く節目の作品でもあった。一読をお勧めしたい。

（東京学芸大学）